神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅷ

－後期前葉期　堀之内式土器文化期の様相　その２－

－主要遺跡の一括出土事例－

縄文時代研究プロジェクトチーム

Ⅰ．はじめに

本プロジェクトでは昨年度から後期前葉期･堀之内式土器文化期の様相をめぐる研究を開始した。昨年度は報告書を中心とした文献収集、基礎的なデーターベース作成を行い、研究略史、地名表・参考文献を『研究紀要15』に掲載した。２年次目の今年度は資料のデーターシートを作成すると共に、住居址検出遺跡を中心とした主要遺跡の集成化と、来年度以降編年案を構築するため、短期間に形成されたと考えられる一括出土事例（層位的出土事例を含む）の検討を行った。本号では一括出土事例の中から、良好な一括出土事例12例を選んで掲載した。なお挿図の縮尺は住居址が1/120、土器が1/10を基本にしている。本文中の遺構名は報告書に準拠した。土器の脇の括弧内の番号は報告書の図番号を示す。土器の記述は一般的に用いられている用語を使用することにし、磨消縄文という用語には充填縄文を含むものとする。　（松田光太郎）

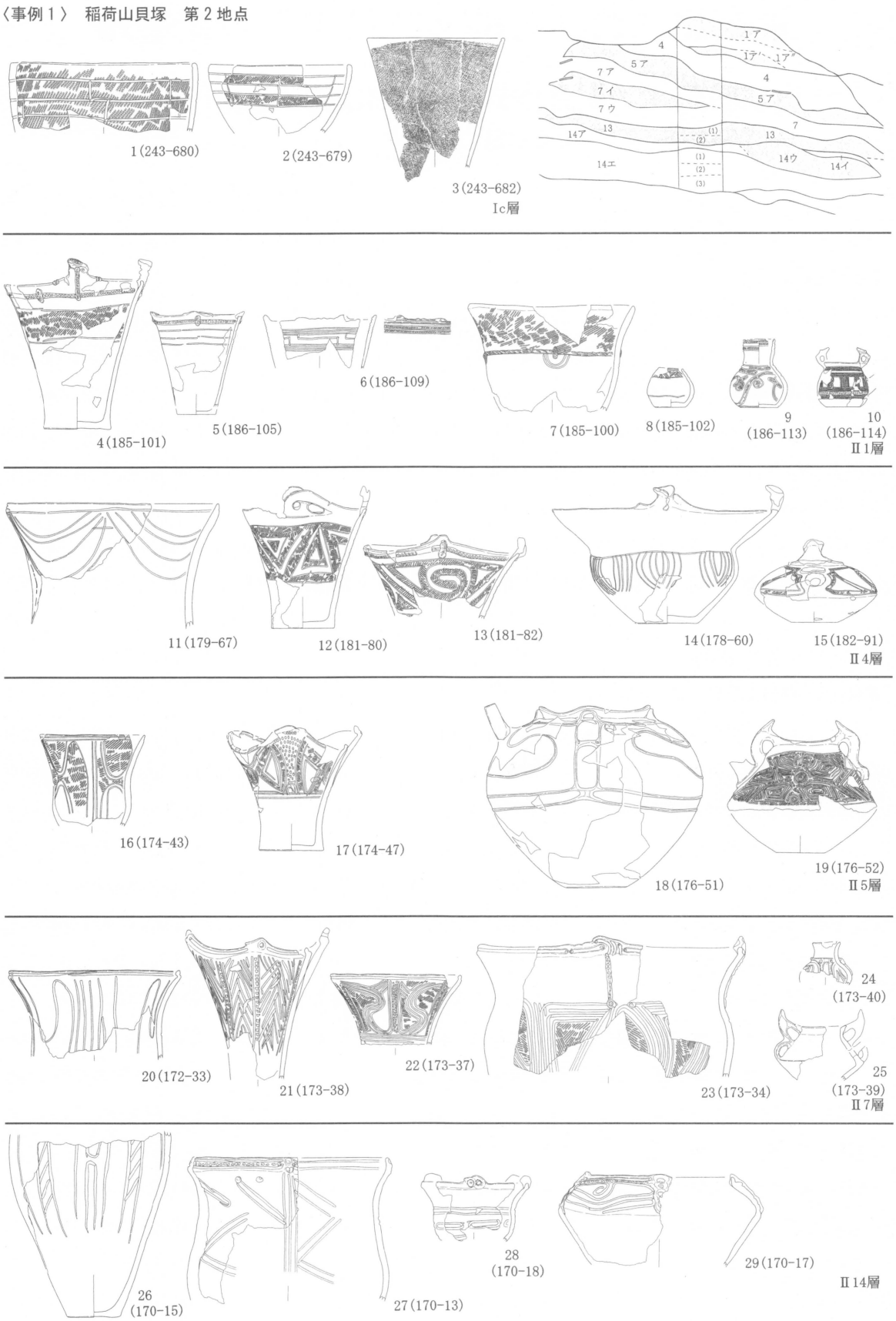
Ⅱ．一括出土事例

〈事例１〉　稲荷山貝塚　第２地点（第１図）

稲荷山貝塚は、横浜市南区山谷に所在する遺跡で、台地上に５ヶ所の貝層が存在していた。1930年の池田健夫氏らの調査で貝層の上下において出土土器に違いがあることが指摘されていたが、2000年のかながわ考古学財団の第１・２地点の発掘調査でも、貝層の層位によって土器の様相に違いが見られた。ここでは第２地点の出土事例を紹介する。第２地点では貝層（Ⅱ層）は14層（Ⅱ１～Ⅱ14層）に細分され、貝層上にＩｃ層（黒色土層）が存在していた。報告書では貝層中では504点、Ｉｃ層では65点の土器が掲載されている。貝層全層位から土器は出土しているが、時期的にまとまりのある層からの出土遺物を抽出して第１図に示した。貝層は原則的に数字の大きい層ほど下位に存在した。Ⅱ14～Ⅱ７層は堀之内1式土器、Ⅱ６～Ⅱ２層は堀之内２式土器、Ⅱ１層は堀之内２式・加曽利Ｂ１式土器、Ｉｃ層は加曽利Ｂ１式土器を主に出土した。

第１図26～29はⅡ14層出土土器である。26は縦位の曲線的沈線文様をもつ深鉢、27は直線的沈線文様をもつ深鉢形土器、28は頸部を無文とする鉢形土器、29は口縁が内湾する土器である。20～25はⅡ７層出土土器である。20～22は深鉢形土器で、20は縦位の曲線的沈線文様をもつもの、21は直線的沈線文様をもつもの、22は沈線文と縄文をもつものである。23は頸部を無文とする鉢形土器、24は壺形土器、25は注口土器である。16～19はⅡ５層出土土器である。16は縦位の曲線的沈線文様をもつ深鉢、17は磨消縄文をもつ深鉢形土器、18は無頸壺のような器形をなし注口をもつもの、19は注口土器である。11～15はⅡ４層出土土器である。11～13は深鉢形土器で、11は縦位の曲線的沈線文様、12・13は磨消縄文をもっている。14は頸部を無文とする鉢形土器、15は注口土器である。４～10はⅡ１層出土土器である。４～６は深鉢形土器で、４は横位帯状の磨消縄文をもっている。７は頸部を無文とする鉢形土器の流れをくむもの、８は口縁が内湾するもの、９は壺形、10は注口土器である。１～３はＩｃ層出土の加曽利Ｂ１式土器。　（松田光太郎）

〈事例１〉　稲荷山貝塚　第２地点



第１図　一括出土事例（１）

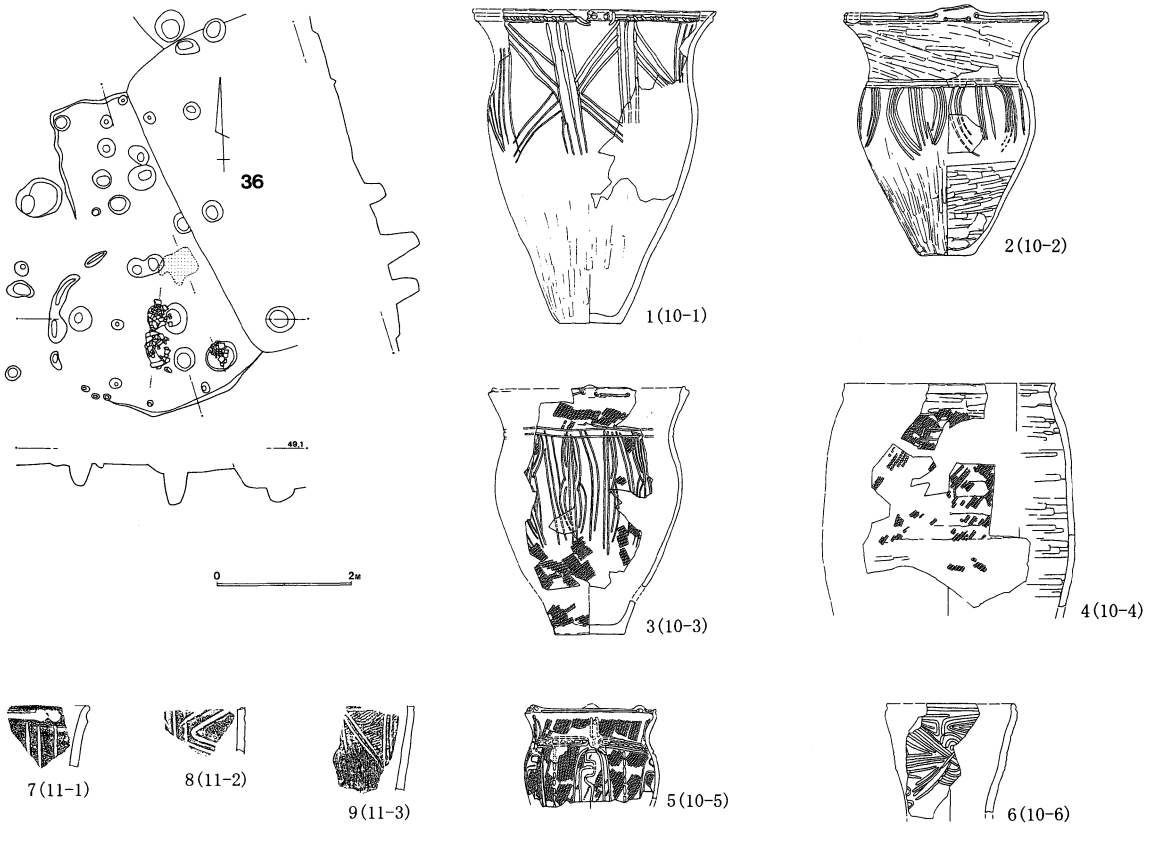
〈事例２〉　岡上丸山遺跡　第Ｊ３号竪穴住居址（第２図）

岡上丸山遺跡は、川崎市麻生区岡上字丸山675番地に所在する。鶴見川の支流によって開析された支丘の舌状台地のつけね部に立地し、標高は約50～60ｍを測る。昭和59年に確認調査、60年に本格調査が実施され、一例ではあるが竪穴住居址が約25軒検出されており、中期末～後期前葉の集落址が確認されている。

第Ｊ３号竪穴住居址は調査区の北西端、Ｂ・Ｃ－４・５グリッドに位置し、住居址の東側1/3程は古墳時代の第36号竪穴住居址に切られており、遺存状態はよくない。炉が住居址のほぼ中央部に配置され、柄鏡形の形態を呈するようであるが、遺存状態のためか不明であると報告されている。遺物は土器が多量に出土しているが、石器は皆無である。報告書には１～９の堀之内1式に帰属する土器が掲載されており、出土位置はいずれも床面に近いものと思われる。１は炉の南西部から出土しており、２と互いの底部を向き合わせるような状況を呈して出土している。頸部がわずかにくびれる深鉢形土器であり、懸垂文と斜位の沈線で文様を描いている。２は頸部に無文帯をもつ深鉢形土器である。胴部に２条の沈線が横位に巡り、その直下に３条１単位の懸垂文、弧状文の沈線で文様を描いている。３は住居址南壁付近から出土した深鉢形土器である。縦位、弧状の沈線で文様を描き、短い単位の縄文を施している。４は炉の南東部から出土した樽形を呈する深鉢形土器である。縄文がほぼ器面全体に施されている。５は頸部がわずかにくびれる小形の深鉢形土器である。縄文を地文とし沈線と刺突により文様を描いている。６は小型の深鉢形土器である。横・斜位、弧状の沈線により文様が描かれている。７～９は口縁部、胴部の破片資料であり、主に沈線により文様が描かれている。

（近藤匡樹）

〈事例２〉　岡上丸山遺跡　第Ｊ３号竪穴住居址

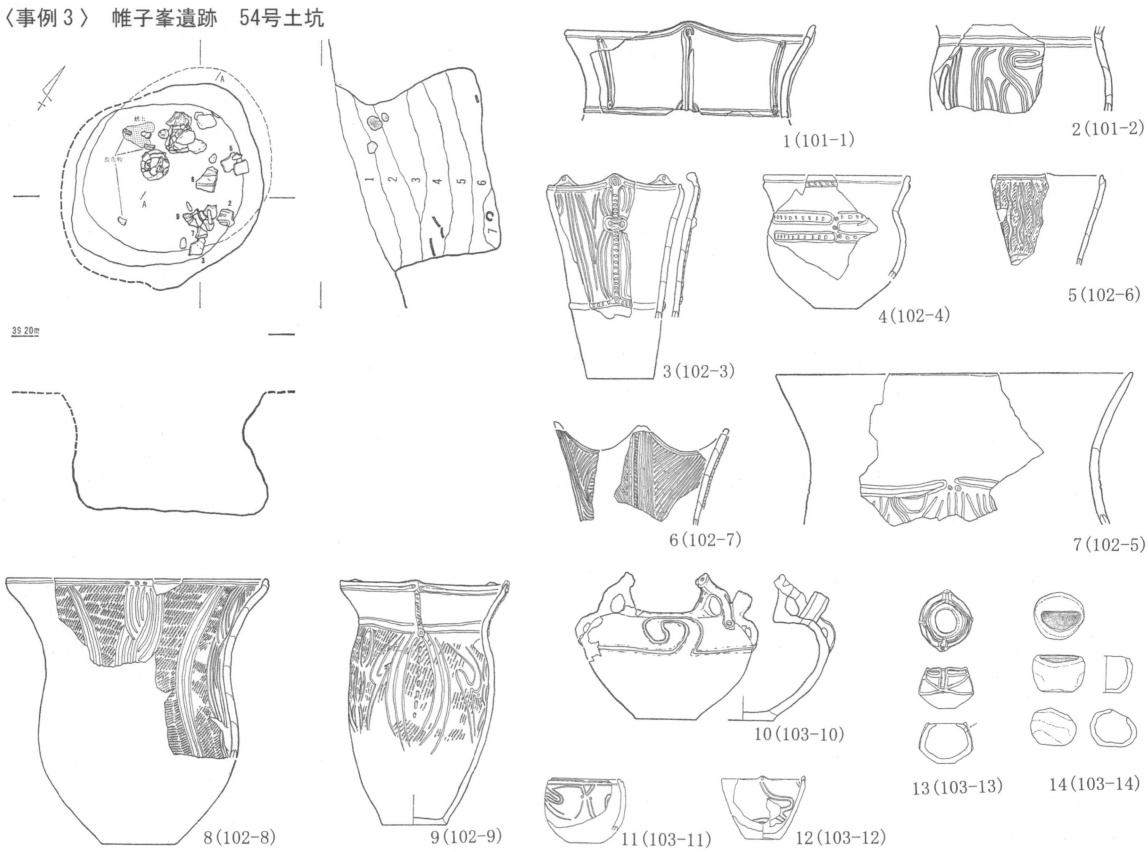


第２図　一括出土事例（２）

〈事例３〉　帷子峯遺跡　54号土坑（第３図）

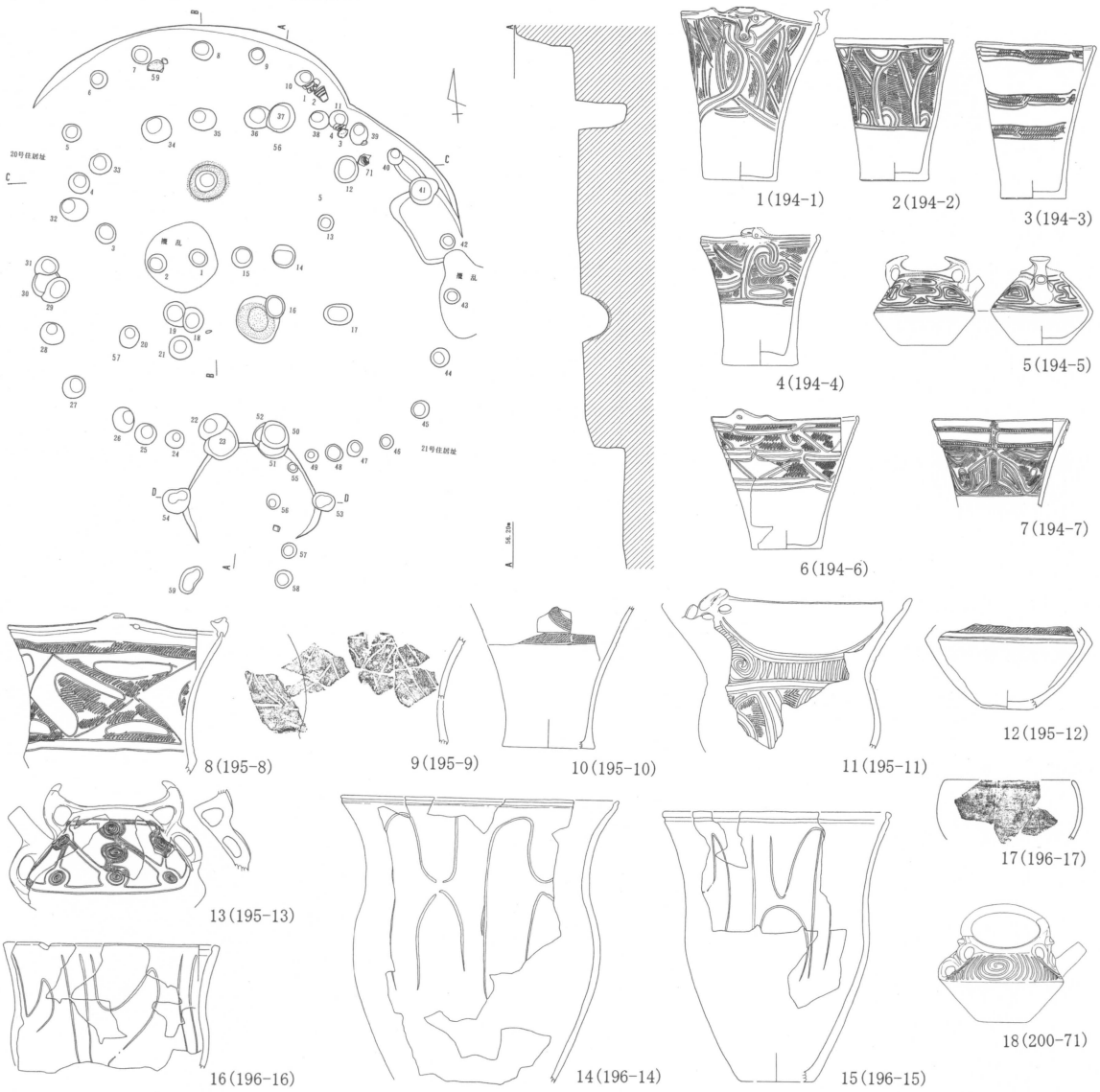
帷子峯遺跡は、横浜市保土ヶ谷区に所在する遺跡で、多摩丘陵の一部、帷子川に臨んだ通称常盤台台地の東南端に位置し、標高35～50ｍを測る。昭和56・57年にかけ断続的に実施された発掘調査により、中期後葉から後期前葉の集落が検出された。

54号土坑は台地南西側斜面に広がる土器捨て場で検出された。底径157cm、深さ126cmを測る比較的大形の土坑である。壁面はオーバーハングし、フラスコ状を呈する。土器140点、石器５点が出土し、報告書中には１～14の土器が掲載されている。土器は覆土中位から出土する土器１～８と土坑底面から出土した９～12に分かれる。底面から出土した９～12は完形ないし略完形で、注口土器と小形土器を含み注目される。１は深鉢の口縁部で緩やかな波状を呈し、沈線と隆帯を垂下させる。２は深鉢の胴部破片。３条の平行沈線で渦巻き文等の文様を描く。３・６・７は口縁に向かって直線的に開く深鉢である。３は３単位の波状口縁で、波頂部から刻み目を持った隆帯を垂下させ、間に沈線で文様を描く。５は縄文の地文上へ蛇行する沈線を垂下させるもの。６も波状口縁で、波頂部から刻み目を持った隆帯を垂下させる。また沈線は密に施され器面を埋めている。４は口径に比較し器高の低い鉢で、沈線で描いた楕円形の区画文を横位に施す。７～９はキャリパー形の深鉢。７は沈線による楕円形区画により口縁部と胴部を画する。８は３条の沈線で文様を描き、間を縄文で埋めたもの。９は沈線で口縁部と胴部を画し、胴部に沈線と縄文を施す。10は注口土器である。注口の上下に把手をつけ、隆線で文様を描く。11～14はミニチュア土器。11・12は沈線で文様を描くもの。13は２対の小把手を有する算盤玉状の土器である。14は無文であるが、内外面が赤彩される。　（小川岳人）



第３図　一括出土事例（３）

〈事例４〉　原出口遺跡　20・21号住居址



第４図　一括出土事例（４）

〈事例４〉　原出口遺跡　20・21号住居址（第４図）

原出口遺跡は横浜市都築区川和台に所在し、多摩丘陵に位置する遺跡である。集落は後期の住居址・掘立柱建物・ピット群・墓廣などで構成され、標高55～60mの台地に密度高く分布している。時期の主体は堀之内1式後半から堀之内２式前半期である。20・21号住居址は重複する住居で、焼失住居の20住居が新しい。緩やかに傾斜する南斜面の集落南端に構築されている。壁は奥壁の一部のみで、20号住居址床面には焼土がやや厚く堆積する。20号住居址の遺物は比較的豊富な量が認められ、復元資料17点・破片資料37点・土製品2点・石器などである。１～５は床面、６～17は覆土である。朝顔形深鉢１～４・６・７・10、深鉢８・９・11、注口土器12・13、沈線文のみで文様が描かれる深鉢形土器14～16などがある。

21号住居址の出土遺物は復元資料１点・破片資料21点・石器・石製品などである。18は算盤玉状の器形を呈する注口土器である。

（天野賢一）

〈事例５〉　小丸遺跡　29号住居址（第５図）

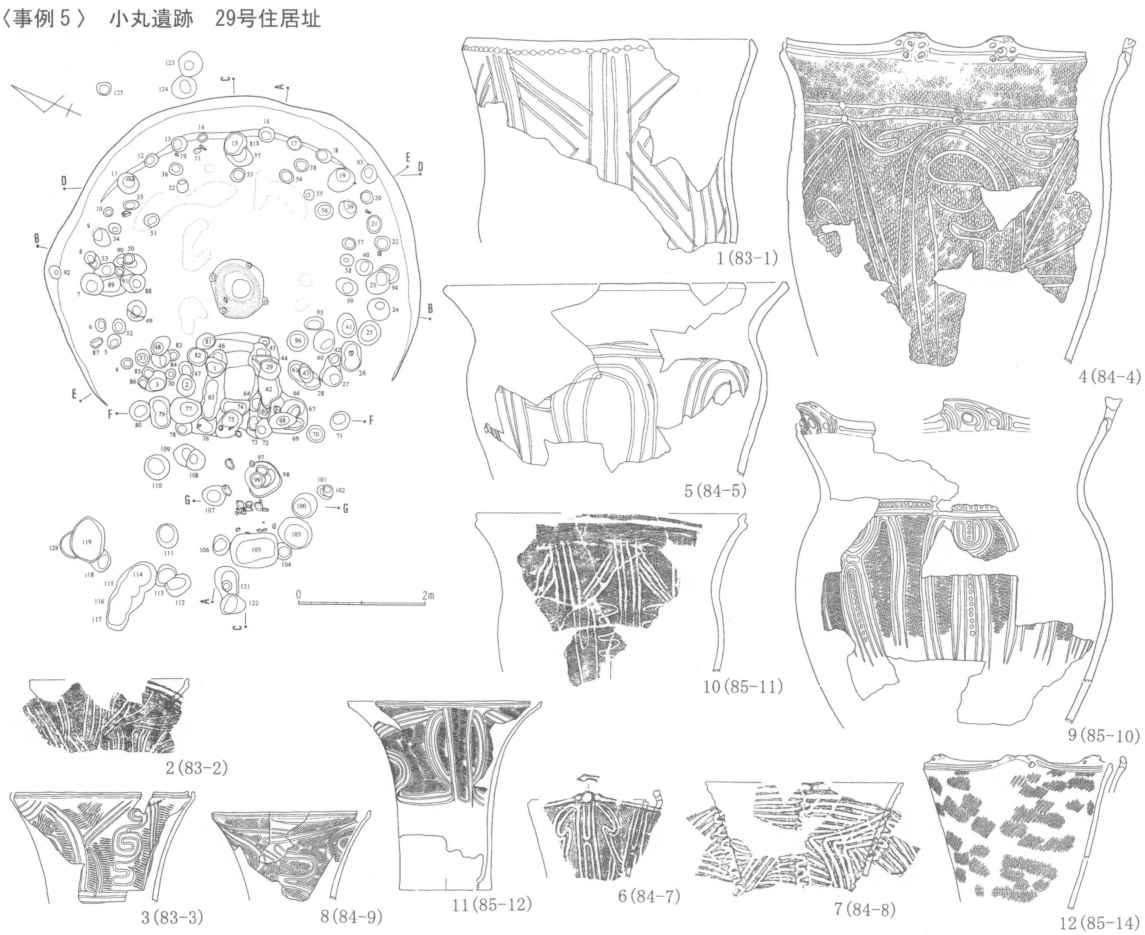
本遺跡は港北ニュータウン地域の西部、横浜市都筑区大丸11付近に所在する。標高53～63mに位置し、第１次調査が昭和50年～51年、第２次調査が昭和57年に行われ、遺跡全体に縄文時代、特に後期前葉から中葉にかけての住居址を中心とする遺構が検出された。

本住居は西側の谷に向かう傾斜地で、標高58mに位置する。奥壁上と主体部入口では１mを超える標高差があるため、入口部分から張り出し部では掘り込みの検出が出来なかった。柱穴の配列から３軒の重複があり、２回の建て替えを考えている。また床面が被熱していたことから火災にあったと報告されている。出土遺物は床直上ではほとんど見られず、大半は覆土からの発見で、住居に伴うものというよりは、周辺に形成された包含層の遺物が本址に流れ込んだと判断している。大半は堀之内１式の後半から終末にかけてのものである。報告者は住居の特徴を加味して、構築時期も出土した土器と同時期と推定している。

報告書には出土遺物は土器を50点、石器を45点掲示している。報告されている土器は、土器蓋２点・土製品１点を除き、すべて深鉢である。頸部がくびれるもの（１・４・５・10・11）、口縁部が外反するもの（２・３・８・12）、底部から直立するもの（７・８・12）が見られる。また体部の施文は、懸垂文や蛇行文といった沈線のみのもの（１・２・５・７・10）、縄文と沈線を組み合わせたもの（３・４・６・８・９・11）、縄文のみのもの（12）が見られる。この紙面に取り上げなかった土器も沈線を主体とするものか、縄文と沈線と組み合わせたものである。

（宗像義輝）

〈事例５〉　小丸遺跡　29号住居址

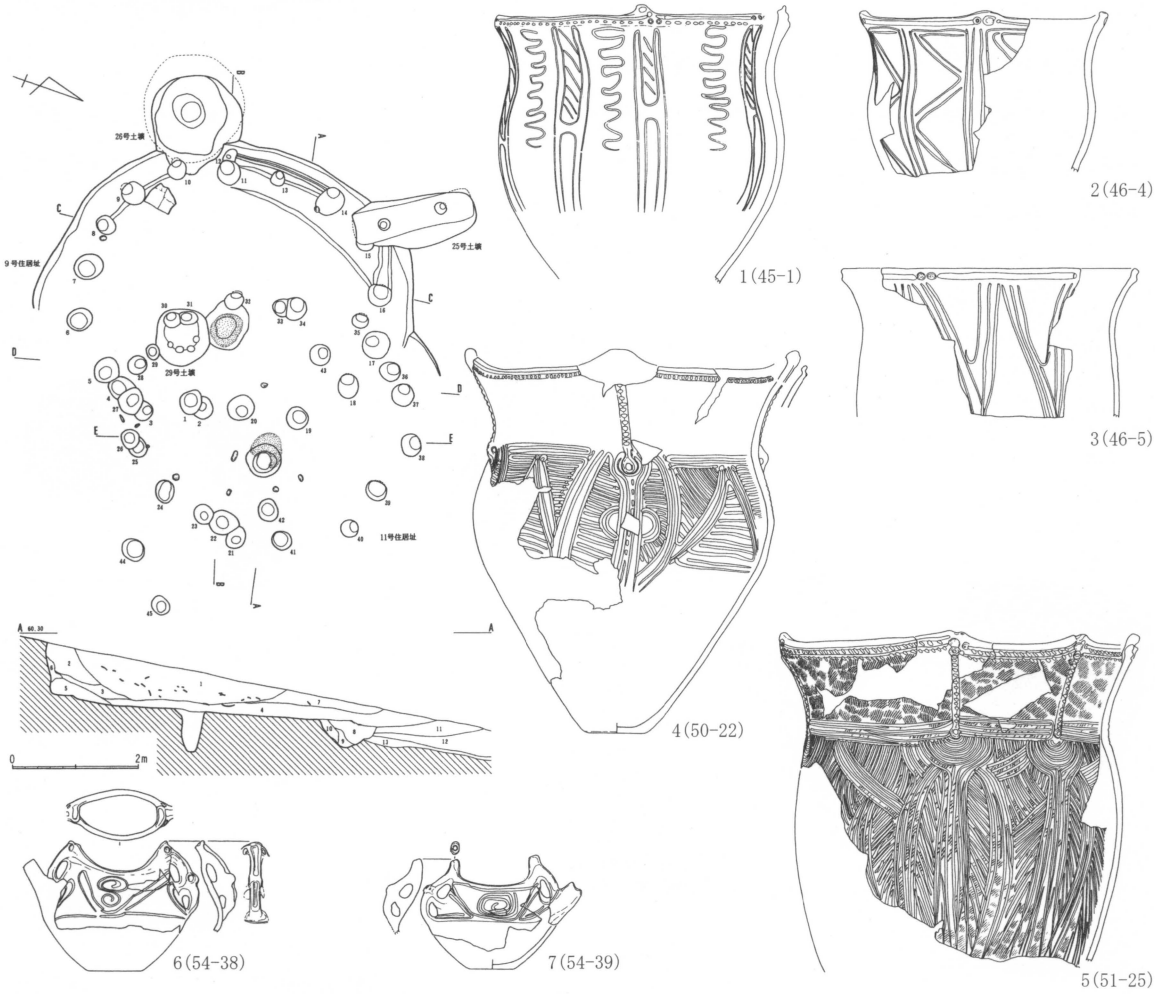


第５図　一括出土事例（５）

〈事例６〉　華蔵台南遺跡　９号住居址（第６図）

本遺跡は港北ニュータウン地域の北西部、都筑区荏田南一丁目20付近の多摩丘陵東端にあり、堀之内１式を主体とする後期の集落址である。９号住居址に堀之内１式の良好な一括出土事例がある。本住居址は標高60m付近の東に下る傾斜地にあり、東半部に11号住居址と切り合いをもちこれを切っている。９号住居址は主軸4.5mほど、副軸5.6mほどの楕円を呈する主体部のみが発見され、張り出し部の検出はない。９号住居址覆土１層下層から２層中に大量の土器片が投棄された。報告書に掲載された復元土器は堀之内１式に帰属する39点、出土した土器片には堀之内1式初頭の土器や主体となる土器群とは時間的間隙をもつ堀之内２式土器も出土している。１は唯一床面で発見された深鉢形土器で、「H」状文と蛇行文を交互に配する。２以下はすべて覆土中からで、２には懸垂文とそれを連結する斜行文、３も２に類するもので「y」字形をなすもの、他に懸垂文に弧状文で取り囲むもの、懸垂文と蛇行文を配するものなどがあり、これらが本地域の主体をなすとされる。４、５は頸部以下の胴部を主文様域とするもので、懸垂文と、渦巻文が多用される。これに比べ丈の短い鉢形土器や渦巻文の施された注口土器（６、７）もある。図示しえないが朝顔形深鉢１点、粗製深鉢（複数沈線、指頭による条痕文、縄文）、浅鉢、壺形土器、袖珍壺、が出土している。報告者によると、これら主体となる土器は堀之内１式の終末に位置づけられる。　（阿部友寿）

〈事例６〉華蔵台南遺跡　９号住居址



第６図　一括出土事例（６）

〈事例７〉　池端･椿山遺跡　Ｊ９号竪穴住居址（第７図）

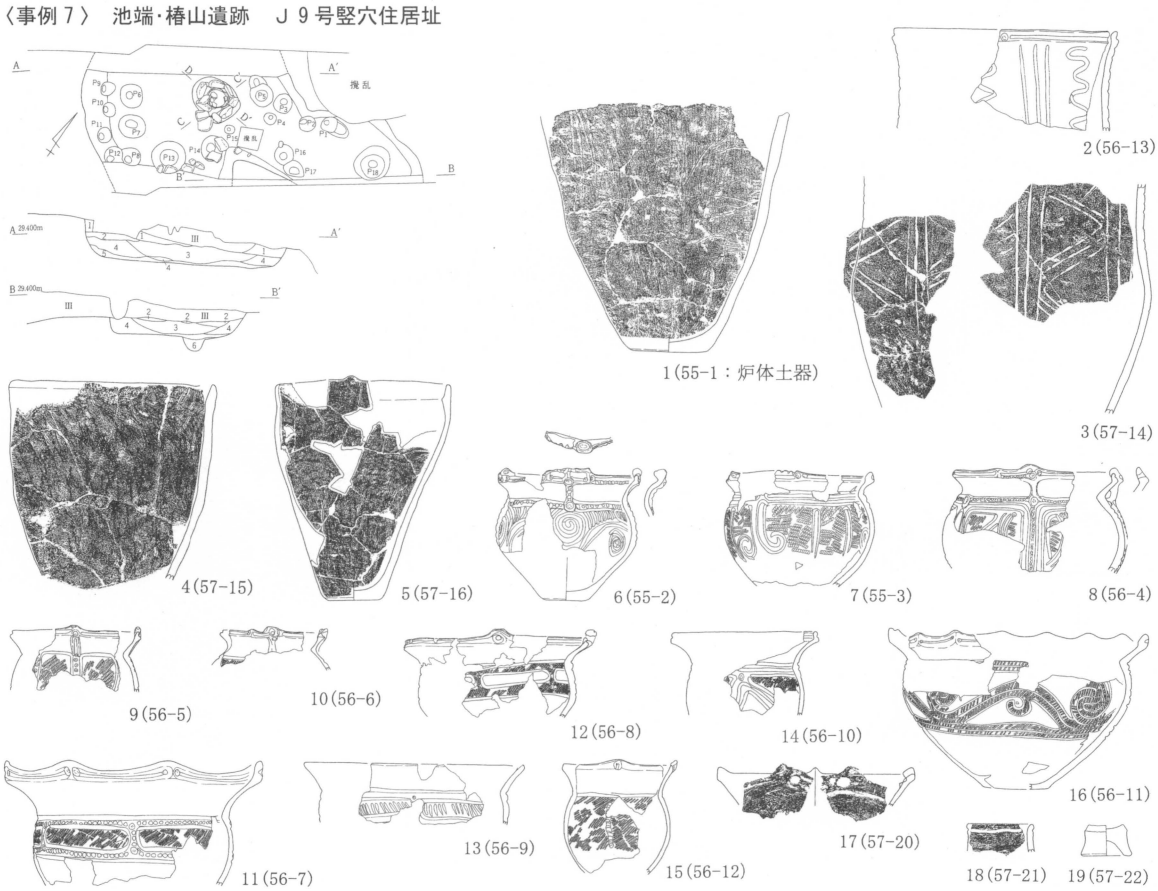
池端・椿山遺跡は、伊勢原市池端に所在する遺跡で、標高30m程の伊勢原台地北縁に位置している。平成14年に実施された発掘調査により、中期中葉・後葉、後期前葉～中葉期の集落の存在が明らかになった。

Ｊ９号竪穴住居址は、いわゆる柄鏡形の形態を採り、石囲埋甕炉が付されている。本址埋没後にＪ１号敷石住居址（堀之内２式期以降か）が構築されており、直接的な切り合いを有する重複事例となっている。報告書には、後期前葉～中葉期に帰属する復元資料22個体(深鉢８・鉢11・浅鉢１・壺形土器１・台付土器１)、破片資料78点（深鉢43・鉢27・浅鉢３・注口土器５）が掲載されている。

第７図１は石囲埋甕炉の炉体土器として用いられていた無文粗製深鉢で、口縁部は意図的に打ち欠かれたものと思われる。２・３は頸部に緩やかな括れを有し、縦位基調の沈線が施される深鉢である。いずれも３単位の沈線による懸垂文が施されているが、２は懸垂文間に縦位蛇行沈線を配し、３は３単位の斜行沈線で懸垂文を連絡している。４・５はナデ基調の調整が施された無文の粗製深鉢で、炉体土器に類似した資料である。６～16は胴部が球胴状をなし、強く外反する口縁部が付された鉢である。口縁部は無文を基調とし、小波状をなすもの（11・16）や小突起が付されるもの（６～10・12・15）が多く、縦位隆帯（６・９・10）や橋状把手（８）が付されるものもある。胴部には縦位基調（７・12)、あるいは幾何学状（６・８～14・16）の区画文が配されており､区画内には縄文（７～12・14・16）や沈線（６・13）が充填されている。11～13・16は胴部文様帯の下端区画が明瞭で、胴部上半を中心とする狭い範囲に文様が展開する。一方、６～９・14・15は下端区画が不明瞭で、施文域は胴部下半にまで及んでいる。17は直線的にひらく無文の浅鉢である。口縁部には小突起が付され、突起下には円形の押捺文が施されている。18は壺形土器、19は台付土器として分類されている小形の資料である。

（井辺一徳）

〈事例７〉　池端･椿山遺跡　Ｊ９号竪穴住居址



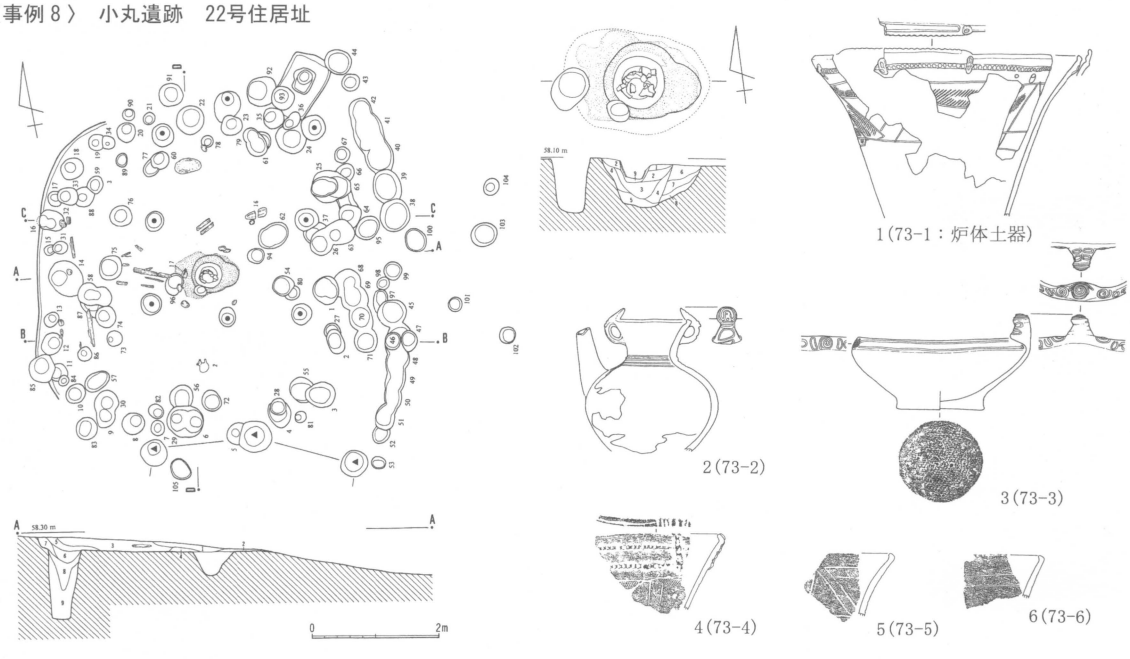
第７図　一括出土事例（７）

〈事例８〉　小丸遺跡　22号住居址（第８図）

遺跡の概要は〈事例５〉で触れている。本遺跡の中で堀之内２式の良好な遺構として22号住居址が挙げられる。標高59mに位置し、東側の谷を望む斜面への占地で入り口を谷の方角へ向けている。周辺には多数の掘立柱建物址が存在しており７号と37号と切りあい関係にあり、本址の方が新しいと判断される。他の竪穴住居との切り合いはみられない。また、本址は最低３回の建て替えがあったと想定されている。もっとも新しいと判断されるａ号は火災にあっていることが床面と覆土中の炭化材の遺存と焼土の堆積から想定されている。ｂ号はａ号とほぼ同じ箇所、もしくはａ号よりわずかに内側に柱穴を配置している。これはａ号がｂ号を踏襲したものと考えられる。ｃ号は奥壁側、左右壁側ともに３柱穴からなる住居址を想定している。出土遺物は土器が14点、石器が５点報告されている。

１はａ号炉址の炉体土器。接合状態が悪いため図上復元となっている。焼成はややもろい面がみられるが、炉に用いられたことによる二次焼成の可能性がある。報告者は口縁部は南三十稲場式の特徴を受け継いでいるとしている。２は注口土器。胴部最大径18cm弱。現器高は17.5cm。黒褐色を基調とした焼成良好な土器。器面は良好に研磨されている。頸部くびれ部をめぐる平行沈線が注口部付け根を巡る沈線と連絡するが、注口部の反対側にはこうした文様の施文はない。把手は全体に施文があるが簡素。炉址の左側空間で出土した。３は完形の浅鉢形土器。口径24cm弱。突起を含めた器高は12.8cm。１箇所のみ棒状の突起がつき、その周囲に集中して文様が施されている。また、その対面にも渦巻文が施されているが、この箇所の口縁はごくわずかに高く成形されており、器面は横位に研磨されている。淡い黒褐色を呈する焼成良好な土器である。床面上から柱穴59にかけて出土した。４～６は破片資料。いずれも平行沈線で横帯区画した部分に充填縄文を施している。４は横帯区画から垂下、５は斜行した区画も見られる。これら以外の破片類は若干古い段階のものも含まれるが、１～３の時期と近い段階のものが主体であると報告されている。　（宗像義輝）

〈事例８〉　小丸遺跡　22号住居址



第８図　一括出土事例（８）

〈事例９〉　稲ヶ原遺跡　B－９号土坑（第９図上段）

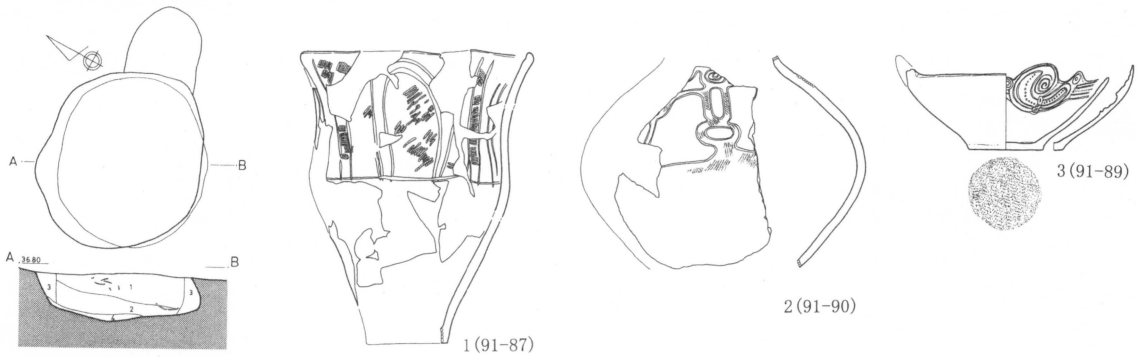
稲ヶ原遺跡は、横浜市緑区に所在する。遺跡は多摩丘陵の一段低位の台地上に位置し、標高は32から35m。鶴見川の支流である恩田川の谷に面している。平成２～３年にかけての調査により、中期後葉、中期末葉～後期前葉の集落が検出されている。うち２基の土坑から後期堀之内式期の良好な資料が得られている。

B－９号土坑は調査区の南端で検出された。タライ形の土坑である。南側の壁面はややオーバーハング気味、北側の壁面は傾斜をもって立ち上がる。報告書には覆土上層から出土した土器１～３が掲載されている。第９図１はキャリパー形を呈する深鉢である。胴上半に平行沈線を垂下させ、間に縄文を充填するが、図左右の沈線間には縄文が施されるのに対し、正面の逆U字形の区画はその外側に縄文が施されるなど、一定していない。２は壺形の土器。上部に把手の欠落痕がある。平行沈線により渦巻き・円形文を描き、平行沈線の中に縄文を充填する。３は浅鉢である。渦巻き状の突起を３箇所に有し、口縁内側には沈線・刺突文をめぐらせる。（小川岳人）

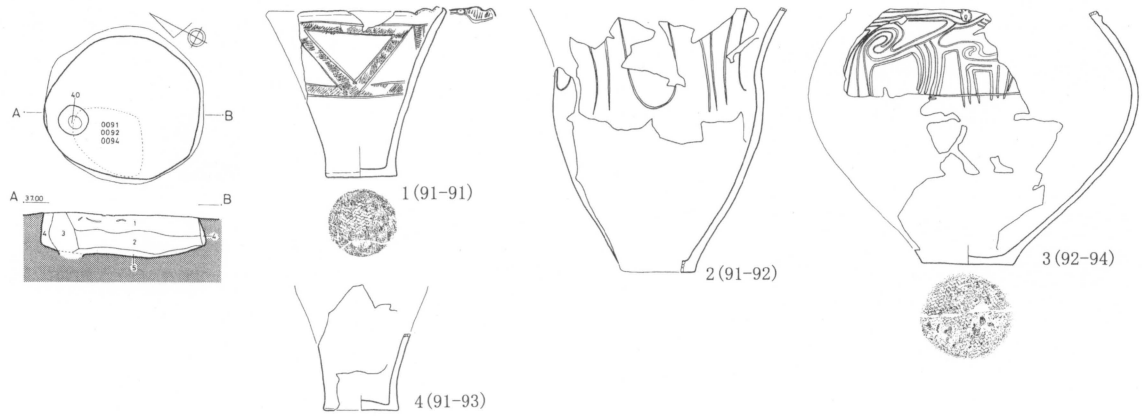
〈事例10〉　稲ヶ原遺跡　B－11号土坑（第９図下段）

B－11号土坑も稲ヶ原遺跡の調査区南端で検出された。B－９号土坑同様タライ形を呈し、壁面は全体にややオーバーハングする。覆土上層からまとまった土器が出土している。１は朝顔形の深鉢で、山形を描く平行沈線内に縄文を施す。口縁には突起を有し、内面に刺突と沈線が施される。２はキャリパー形の深鉢。胴上半に沈線を垂下させる。３は頸部が窄まり、口縁が外側へ開く深鉢とみられる。残存部の上半に沈線で渦巻き文・曲線文を描く。４は無文であるが、朝顔形に開く深鉢の胴下半とみられる。（小川岳人）

〈事例９〉　稲ヶ原遺跡　B－９号土坑

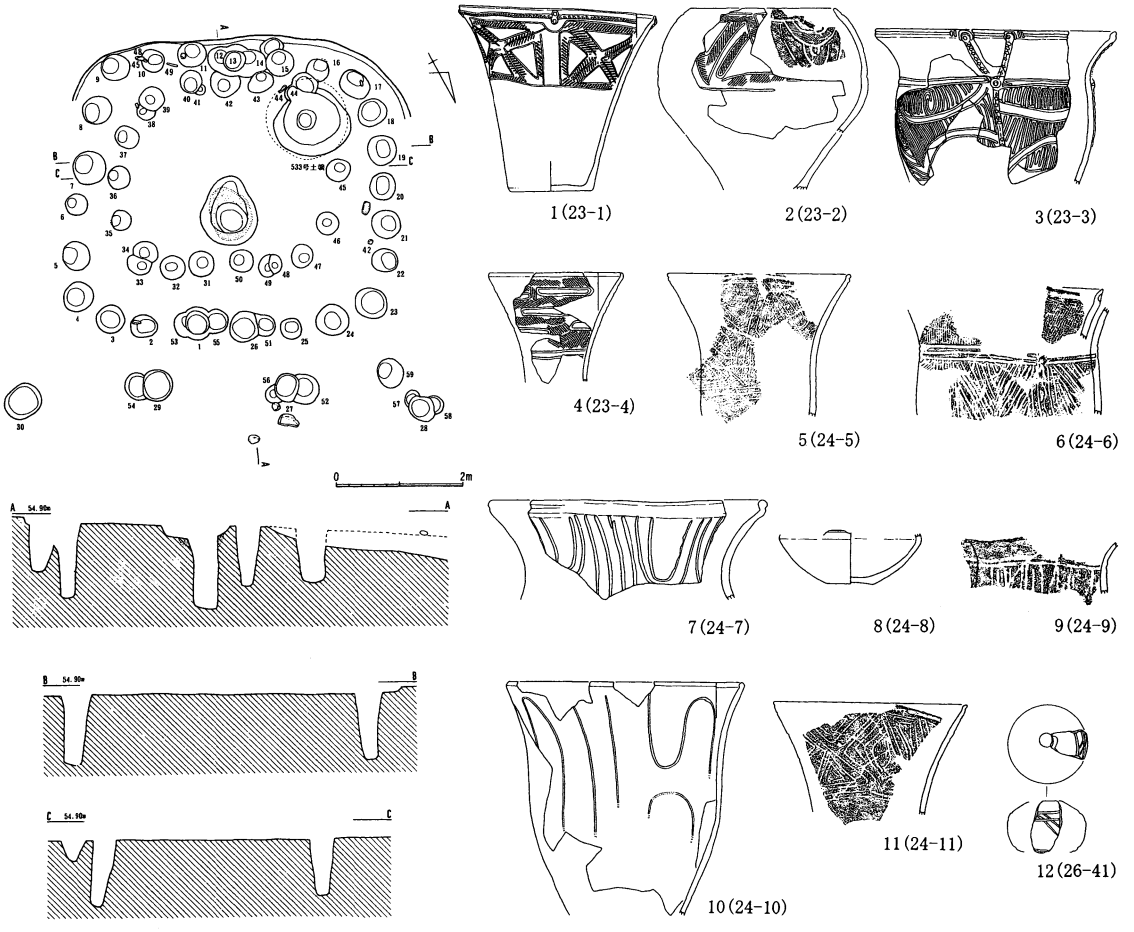


〈事例10〉　稲ヶ原遺跡　B－11号土坑



第９図　一括出土事例（９）

〈事例11〉 川和向原遺跡　8号住居址



第10図　一括出土事例（10）

〈事例11〉 川和向原遺跡　8号住居址（第10図）

川和向原遺跡は横浜市都築区川和台に所在し、多摩丘陵に位置する遺跡である。集落は後期初頭から前葉にかけての住居址・掘立柱建物・ピット群・貯蔵穴・墓廣・単独埋甕などで構成され、標高51～55mの台地西側に密度高く分布している。時期は称名寺式から認められるが、主体は堀之内１式後半から堀之内２式前半期である。８号住居址は緩やかに傾斜する北斜面の集落南端に構築されている。斜面部であることなどから壁は奥壁の一部が確認され、炉と柱穴列などが確認されている。柱穴は方形に近い形態で配列し、内側に古段階の柱穴列が見られる。炉の大部分は重複していると考えられている。住居址の周囲には包含層が広範囲に広がっており、覆土出土遺物との接合関係も多く認められている。遺物は復元資料11点・破片資料28点・土製品１点・石器などである。１は入口部床面相当レベル出土の朝顔形深鉢で、貼付文・刻み隆帯などと四角枠と斜方向の帯縄文により、幾何学的な文様を描く。２は覆土上部出土の無頸の鉢形土器で、帯縄文により枠状・弧線などの文様を描く。３は西側覆土中出土の鉢形土器で、懸垂する隆帯と集合沈線による文様などが描かれている。４・５は覆土と530号土坑など他遺構との接合関係がある資料である。６は緻密な地文の縄文と沈線などによる文様、７は沈線のみで「H」字状などの文様を描く。８は床面出土の注口土器、11は朝顔形の土器で沈線などによる幾何学的な文様を描いている。41は球状を呈する土製品である。

（天野賢一）

〈事例12〉　はじめ沢下遺跡　Ｊ１号敷石住居址（第11図）

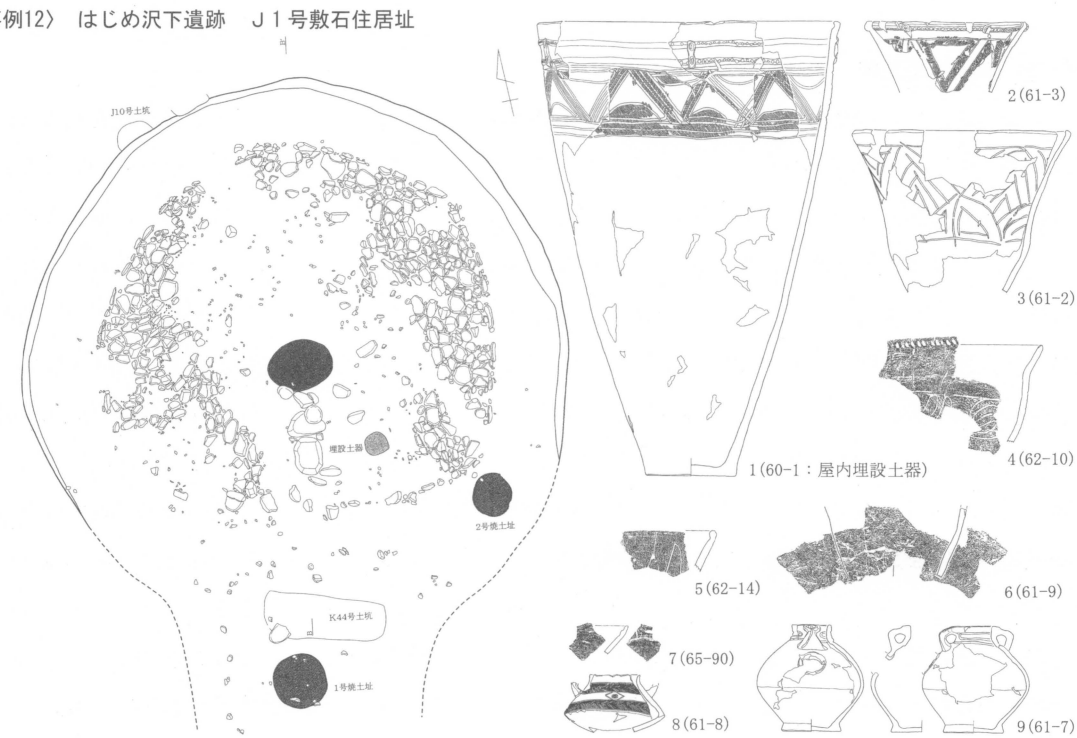
はじめ沢下遺跡は、相模原市緑区城山４丁目に所在する遺跡で、標高160～175mを測る津久井湖北岸の段丘上に位置している。平成18・19年に実施された発掘調査により、敷石住居址・列石・配石遺構からなる後期前葉期の集落が展開している事が明らかになった。

Ｊ１号敷石住居址は主体部径が９ｍを超える大形のもので、主体部全面に縁石を伴う敷石が付され、屋内埋設土器１基、屋内焼土址２（箇所）を伴う。出土遺物は堀之内１式土器と２式土器が混在しているが、量的には堀之内２式土器が主体を占める。報告書には、復元資料９個体（深鉢７・注口土器２）、破片資料78点（深鉢59・鉢11・浅鉢１・注口土器３）が掲載され、埋設土器の帰属時期をもって堀之内２式期の住居址とされている。

第11図１はピット状の掘り方中に破砕された状態で埋置されていた埋設土器である。大形の朝顔形深鉢で、縦長の８字状貼付文で連絡された２条の隆線が巡り、その下段には三角形と半円形を組み合わせた幾何学的な磨消縄文帯が配されている。２は内折する口唇部直下に円形貼付文を伴う隆線が廻る朝顔形深鉢形で、磨消縄文により三角形基調のモチーフが表出されている。３は幅広の口縁部文様帯を有する朝顔形深鉢で、沈線のみで表出された重三角形基調のモチーフが展開している。４・５は頸部に緩やかな括れを有し、縦位基調の沈線が施される深鉢である。４は口縁部～頸部に広い無施文部をもち、口唇部内面に刻みが施されている。５は口唇部が内折するもので、逆Ｕ字基調の懸垂文が粗く配されている。６は外面にケズリにちかい調整が施された粗製の深鉢である。７はやや内湾ぎみにひらく無文の浅鉢で、波状口縁をなすようだ。内面に沈線による文様が施されているがモチーフ等は判然としない。８・９は把手が付された注口土器である。８は胴部が算盤玉状を呈するもので、胴部上半に綾杉状沈線を充填した横帯が２段廻っている。９は床面からやや浮いた状態で出土したものである。直立気味に立ち上がる口縁部には窓枠状の区画沈線が施され、渦巻文が施された橋状の把手が付されている。

（井辺一徳）

〈事例12〉　はじめ沢下遺跡　Ｊ１号敷石住居址



第11図　一括出土事例（11）